

禅の友

Zen no Tomo

10

October 2025





ご本山だより 大本山永平寺【作法】

大本山永平寺
福井県吉田郡
☎〇七七六・六三・三一〇二



「永平寺の修行は厳しいのでしょうか」と言われることがあります。ところで永平寺のなかが厳しいのでしょうか。筆者は、不自由であることだと思えます。朝起きてから夜寝ている間までほぼ全てに作法があります。作法とは仏の行いといってもいいでしょう。

永平寺に上山するということは、生活習慣はもちろん、言葉遣いや立ち居振る舞い、衣食住の全てが変わります。これらは、道元禅師さまや歴代の指導者たちが「仏さまの行いを私たちも同じように行おう」と定めたものです。一日中、寝ている間でさえひたすらに仏さまと同じことを行い続けるのが永平寺の修行です。しかし、それまで過ごしてきた中で身についた癖や生活習慣はそう簡単に変わるものではありません。気を抜いた瞬間に言葉遣いが乱暴になったり、だらしなく歩いてしま

ったりしてしまいます。それまでは好きなことを好きな時に好きなだけ行えた者たちが、自分の欲求を全く満たすことができない生活に入ります。とても不自由です。時に役寮から指導を受け、仏の型にはまり切れない自分にながら努力を感じ自問自答を繰り返しながら努力をしていきます。身体にしみこむまで繰り返し行うしかありません。

春に上山をしてきた修行僧は十月にもなると作法も身につきた立ち居振る舞いも板についてきました。それまで堅苦しく感じていた作法が、今ではもつとも心が安定する形へと変化していることでしょう。

その姿はまさに仏さまそのものの。その様子を見てみると永平寺の一番の宝は伽藍（がらん）や仏具ではなく修行僧であるのだということを感じます。



ご本山だより 大本山總持寺

【御両尊御征忌会】

【法堂上見挿鋏入】

(法堂上に鋏を挿む人を見る) 『洞谷記』

大本山總持寺

神奈川県横浜市

☎〇四五・五八一・六〇二二



標題は瑩山禪師遺偈の最後の七字です。

遺偈とは一般に「辞世の句」と呼ばれます。禅僧の世界では自身の境界、弟子に対しての教えや誠めを示すものです。

正中二(一三二五)年八月十五日瑩山禪師は遺偈を述べられ、大いなる生涯を閉じられました。自らの命が尽きるまで田に鋏を入れ種を蒔き、稲を育てることは自らの教えを多くの弟子達に伝え、護り続けていくことであって、それは法堂を中心として日々の修行に励む修行僧に対して厳しくも慈愛に満ちたお心で綴られた最後の言葉なのがあります。

両大本山では開山忌のことを「御征忌」と申します。つまり大本山總持寺では開祖瑩山禪師、二祖峨山禪師(お二方を御両尊と申します)をお慕いしての法要であります。この「御征忌」には焼香師様が禪師様の代理として法要の導師を勤められ、報恩の誠が捧げ

られます。

大本山總持寺の御両尊御征忌会は十月十二日より十五日までの四日間行じられます。そして最終日には、本山独

住第二十六世貫首石附周行禪師さまが本堂(大祖堂)中央にある須弥壇上の御両尊の真正面に建てられる仮の須弥壇に登り、まず祈りを捧げる言葉や、報恩の言葉を、香を焚きながらお唱えし(これを香語といいます)、その式に参加している大勢の僧侶(修行僧)達と大問答を展開します。この儀式を「対真上堂」と申し、開山以来の厳しい修行の型を示すもので、厳肅で荘厳な式が執り行われます。通常は須弥壇に登り「上堂」の儀式が行われますが、御両尊を背にしないように対面に仮須弥壇が設けられ、御両尊さまと相對して「対真上堂」するのは總持寺特有のものであります。

また十月より冬安居制中に入り、首座和尚を中心に一〇〇日間の修行期間も始まります。

選・坊城俊樹

流れ星今日も戦ふ国があり

鳥取県 徳本 義則

評

戦う国とはやはりイスラエルや中東の国と思う。その理由は様々であろうが、夜の天空を流れる流れ星にとっては些細なことなのかもしれない。そして平和な国に居るからこそ流星を眺めていられるという幸福を忘れてはならないのだと思う。

夏帽子ふかぶか被り八十路生く

静岡県 堤 千春

評

これはやはり八十路を迎えられた人間としての余裕とお洒落心なのであろう。少し大きな夏帽子をふかぶかと被られている姿もまた粋である。それは人生の深みと余裕につながるからであらう。しかも案外派手なボルサリーノ風の帽子だったりして。

◆ サンガラスより見透かされみるやうな 岐阜県 大下 雅子

◆ 荒梅雨や目薬させば口開く 長野県 森山 昌子

◆ 表れは五人のままの泡立草 長崎県 崎田 定雄

◆ 一回戦七回コールド夏終はる 神奈川県 佐野 勇

◆ 麦藁帽子振りて舟呼ぶ渡しかな 東京都 鈴木 英治

◆ 西行像半跏趺坐なる涼しさよ 千葉県 長澤 きよみ

◆ 青嵐あの時の店とあの人 山口県 稲村 みどり

◆ 画用紙をはみ出してみる滝の音 大阪府 柏原 才子

◆ 音大のステンドグラス夏木立 埼玉県 伊藤 博

◆ つれづれに歳時記めくる夜の秋 山口県 御江 恭子

選者吟

彷徨へる蝶秋蝶と出逢ひたる 俊樹

作句小見

彷徨える蝶とはすなわち夏蝶である。それが秋口まで生き残っている。姿はもう色あせて羽のどこかが欠けていたりする。そんな悲しい蝶の自身の死を悟ってかフラフラと彷徨っている。こうして季節は容赦なく変遷するのである。

選・長澤 ちづ

復興のならざる更地は夕焼けのくれなぬ
抱き闇に入りゆく

岩手県 阿部 照子

評

この復興は東日本大震災からの復興のこと。あれから十四年経て、災害も様々な地で起き、こうして注が必要になった。そんな時を経てもまだ復興為らない場所があるという。夕焼けの夜闇の対比が、様々なことを思わせる。

久々に隣家は孫ら来をるらし泣くを笑ふ
を聞くも楽しや

群馬県 松本 さえ子

評

過疎化が進む地なのだろう。隣家であつても賑やかな子らの声が響いてくると、うれしい気がする。すると率直に詠われている。

◆ 汗に濡れずり落つる眼鏡幾たびも泥手に触れつつひと日暑振る
岩手県 穴戸 さとる

◆ 噴水の一人芝居を見るベンチ夕焼けせまる南風の中
兵庫県 佐伯 幸子

◆ 下駄の音君と重ねて夕暮の石畳の道そぞろ歩めり
埼玉県 白藤 巳玲

◆ 巣立ちしたる雀の子らし狭庭辺の若葉にまぎれ轉りやまず
鳥取県 眞山 博充

◆ 一匹の働き蜂が生涯で集める蜂蜜ひと匙ほどと
埼玉県 鎌田 国寿

◆ 惜しげもなく妻は出したり粗大ゴミに嫁入り道具の足踏みミシン
岐阜県 後藤 進

◆ 昨夜の雨に横断歩道は洗われて今朝は白緑くきやかに見ゆ
兵庫県 前田 あつ子

◆ 昭和の日鯉節一本買ひ込んで削りながらに幼き日想ひ
宮城県 阿部 澄江

◆ 溝に生ふるかやつり草の茎太く猛暑の日々をしかと根付きぬ
広島県 徳永 進一郎

◆ 夏雲の流れをうつす池の面岸辺に朽ちし和舟揺れいて
静岡県 又平 幾世

選者詠

二筋の雲を曳きゆく機影にて山の上空
ぷつんと消えぬ

ちづ

作歌小見

猛暑続きの横断歩道を独自の視点で捉えた前田さんの一首、ふと得た知識から呼び覚まされた感動を感情を交えず詠われた鎌田さん、鯉節の味覚から時代感覚を引き寄せた阿部さんの歌など、暑さにめげぬ作品の数々に励まされました。